

養蜂、企業に広めCO₂減

秋田屋本店(岐阜市)



SDGsと親和性の高い養蜂＝山県市長滝、秋田屋本店長滝養蜂場

工場にはRPFボイラー導入



「普段行っている会社の事業がSDGs(持続可能な開発目標)に直結している」。秋田屋本店(岐阜市加納富士町)の中村浩康社長(40)は、主力事業の養蜂がSDGsと高い親和性を持つことを訴える。ミツバチが果たす多くの役割がSDGsの達成に貢献しているといい、養

【会社概要】1804年に木材商として初代中村源次郎が創業。6代目源次郎が87年に養蜂部を立ち上げ、養蜂事業に参入した。1931年に合資会社化、61年に株式会社化した。89年にチアバック(ストロー付きアルミソフト容器)事業を始めた。近年はオンラインショップに力を入れ、多彩な蜂蜜食品を展開する。グループ全体の従業員は約230人、2021年8月期の売上高は約80億円。

ら、これまでに中部地方を中心に、自動車関係やホテル、木材などの約40社が導入している。社屋の屋上に巣箱を設置する企業が多いほか、工場や施設などの空きスペースを飼育場所にするケースもある。

導入した企業の担当者が受ける研修は、山県市内の養蜂場で春と秋に開催。飼育の脅威となる病気や害虫の対処法、越冬への備えといったノウハウを丁寧に教える。中には30人もの従業員が養蜂に携わる企業もあるといい、社内コミュニケーションの醸成にも有効。中村社長は「導入企業を増やすのはもちろん、企業同士が交流する場もつくりたい」と展望を語る。

また、環境に配慮した設備投資も推進。子会社で食品製造を手がける秋田屋フーズの洞戸工場(関市)にRPFボイラーを導入し、5月に本格稼働を始めた。廃プラスチックや古紙が主原料の燃料を燃やし、発生する蒸気をゼリー飲料を製造する熱源に活用。工場全体で必要なエネルギーの3分の1を賄っているといい、重油を使うボイラーと比べて二酸化炭素を大幅に削減できる。

中村社長は「SDGsの取り組みを続けていけば、環境教育など活動の幅がさらに出てくる。養蜂と食品製造の両面で、できることを増やしていきたい」と意欲を見せる。(山本貴史)



重油を使うボイラーよりも二酸化炭素を削減できるRPFボイラー＝関市洞戸飛瀬秋田屋フーズ洞戸工場